

Title	<大會抄録>十五・六世紀南インドにおける職人層の擡頭について
Author(s)	辛島, 昇
Citation	東洋史研究 (1989), 48(3): 601-601
Issue Date	1989-12-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/154280">http://dx.doi.org/10.14989/154280</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

介したカシュガル・ハーン、ヨルバルスの一六六二年の敕令——軍事行動などを評價して配下のベクにベシケリム地方の土地と水利權を恩賜することを告示したもの——を、オアシス社會のあり方という觀點から光を當ててみるのが可能となる。これにより、清朝支配期に先行するカシュガル・ハーン國、ホージャ政權時代を含め、ウイグル民族社會が形成されて來たという十六——十九世紀のカシュガリアのオアシス社會の社會構造上の基本的性格を一層ふみこんで理解することができる。

## 十五・六世紀南インドにおける職人層の

擡頭について

辛島 昇

ヴィジャナガル期（一三三六—一六四九）のタミル語刻文を讀んでいると、その時代のインド半島東南岸のタミル地方で、手工業が發展した様子を見て取ることができる。そのことは、手工業に關係する税目の検討からも言いうるが、この報告では、織布工であるカイコラと鍛冶工であるカンマラの權利について記す、それぞれ五つの刻文（十五・六世紀）を取り上げて、論じることにする。

初めの五刻文は、タミル地方中部のカイコラ達が、特別の機會に與に乗り法螺貝を吹く權利を地方領主によって認められたこと、後の五刻文は、同地方のカンマラ達が、地主層によって課されていた三つの特別税を免除されたことを記している。兩者の場合と

も、それらの權利は、先ずタミル地方北部で認められ、それが中部にまでおし廣げられたことが分かる。

ヴィジャナガル期の多くのタミル語刻文からは、王に忠節を誓う地方領主が、職人達を寺領に住みつかせて庇護を與えた様子をも見て取れるが、ここで検討する十刻文は、十五・六世紀における職人層の擡頭が、ヴィジャナガル王國のタミル地方支配の進展と密接に關連していることをよく示している。それはまた、當然のことながら、當時の商業、とくに外國貿易の發展とも深く關連するものである。

## 清末の經世思想と經世學

大谷 敏夫

清末の經世思想研究は、賀長齡に代つて魏源が編纂した「皇朝經世文編」をもつて始まる。「經世文編」編纂は、この賀氏の「經世文編」をモデルとして清末まで繼續して行なわれた。ここに經世思想研究は、經世學という一つの學術分野を形成することになる。魏源はその著の中で、「學篇」「治篇」という項目を設けたが、經世學を治學として重視したところにその意義がある。魏源は、「公羊學」をその思想的根據としたが、この「公羊學」のもつ變革理論は魏源以後の公羊學者に受けつがれ、最終的に康有爲の學術に繼承された。しかしこの流れとは相互に關連しつつ體制教學であつた朱子學に經世的概念を加味したものもあらわれる。それは曾國藩によつ